

兵庫県指導者研修会（兼有資格者リフレッシュ研修会）

主催：（一社）兵庫県サッカー協会・兵庫県クラブユースサッカー連盟

場所：神戸市勤労会館

日程：2017年11月11日（土）

参加者：102名（兵庫県内1種～4種・クラブ）

講師：内山 篤氏（前U-20日本代表監督）

【プロフィール】

■ 生年月日：1959年6月29日

■ 出身地：静岡県静岡市（現 静岡市静岡区）

■ 選手歴

1982-92 ヤマハ発電機（現 ジュビロ磐田）JSL 通算 195 試合出場

※1987-88 シーズン、日本サッカーリーグ初制覇

■ 代表歴

1984-85 通算 6 試合出場 ※国際 A マッチ 2 試合出場（W 杯メキシコ大会予選）

■ 指導歴

1992- 2008：ジュビロ磐田

※トップコーチ-ユース監督-サテライト監督-トップ監督を歴任

■ 日本代表指導歴

2013：U-17 日本代表、U-18、19、20 日本代表

2013：U-18 日本代表コーチ

2014：U-17、U-18 日本代表監督

2014：U-19 日本代表コーチ

2015-2017：U-20 日本代表監督

内容：[進行] 小森 康宏（兵庫県サッカー協会ユースダイレクター）

18：00～18：10 鈴木氏（兵庫県サッカー協会技術部長）挨拶

新開氏（兵庫県クラブユースサッカー連盟会長）挨拶

18：10～19：40 内山氏 講演

19：40～20：00 質疑応答

【講義】 テーマ 「FIFA U-20W 杯 日本代表報告」



< U-20 日本代表の立ち上げ >

U-20 日本代表は U-18 時に結成された（当時の招集選手の大半はアマチュア選手）。

⇒ 最終、U-20 時は大半がプロ（J リーガー）選手となる。

※ 内山氏は U-19 日本代表コーチから次の世代（U-18）の代表の監督になった（コーチが継続して監督になったのは初である）。

⇒ 当時非常に手応えがあり、それを継続して取り組むことができた。その経験を経て、アジアを勝ち抜き、世界と戦うには「一貫性」と「継続性」が必要であると感じた。

〇〇JAPAN はいらない

⇒ 〇〇監督が推進するサッカーしかできなくなってしまう恐れがあるからである。

重要なことはパーソナリティー (OFF) と メンタリティー (ON) であり、その 2 つは環境と経験で変化して、成長することができる。

< U-19 日本代表の目標（チームとして考え方） >

個人の能力を最大限に生かした中で、チーム力を持って戦う

「チーム戦術の理解と共有」、…「クリエイティブでアグレッシブな攻撃的サッカー」

⇒ 個人・グループ・チームとして仕掛けてボールを奪い、仕掛けて得点を取る

その中で時と場合に応じてカウンターもできる、崩しもできるように徹底的に指導する。

結果…2016 年に行われたアジア最終予選を見事突破して、2017 年 U-20W 杯出場を決める。

< U-20W 杯に向けて >

大きなテーマは「**超戦**」

1戦でも多く試合をする、4戦目以降（トーナメント出場）を目指す。

① 「攻守においてチームコンセプトの徹底と柔軟性の向上」

柔軟性…状況（勝ち点や時間帯、他チームの結果等）によって戦い方を使い分ける。

その為には「状況の把握」「ゲームの流れを読む力」「ゲームをコントロールする力」が必要である。
また「ゲームの流れに応じた戦い方」を共有する。（主導権、時間帯、得点差、選手交代、勝ち点など）

それをチーム内で理解して、**意識的に取り組み続ける**（強い相手との試合の方がよい）

そしてゲームコントロールに努める

⇒ U-19 の時から1年間かけて訓練してきた結果が第3戦（イタリア戦）に繋がった。

※ 予選リーグ最終戦で「勝てばよい」の発想は良くない。どうすれば「超戦」できるか。1戦目、2戦目、そして3戦目（他チーム同士の試合）の状況を把握して、様々なシチュエーションを想定すること、そしてそれを共有することが大切である。

[チームコンセプト 例]

- ・ 3ライン…コンパクト（20m間）
- ・ 攻守一体…切り替え、バランス、危機管理
- ・ 攻守にハードワーク…頭（判断）と身体（動きの中で）
- ・ 全てをポジティブに…タフに粘り強く闘う
（ネガティブ（怯えたら）からは何も生まれない、またリスクをすぎないこと）

U-20W 杯やそれまでの試合映像にてチームコンセプトの解説



「3 ラインを形成、仕掛けて奪う」

「持たせている時（3 ラインの形成）→プレスにかかる時（追い込み）→奪う時」の理解と共有

※ 3 ライン形成、そしてコンパクトはプレスバックを行う為のモノではない。U-20 日本代表ではプレスバックの強要はしなかった。理想の奪い方は「奪って攻撃すること」、「前向きなインターセプト」である。また世界と戦い感じたことの1つがターンの巧さと速さである。世界相手ではなかなかプレスバックがうまくいかないことの方が多い。

⇒ コンセプトをチーム内に浸透・徹底させるにはトレーニングを継続して行い、言い続ける事が大切である。

② 「的確な判断の共有とそのプレー精度」

判断力とは…？

観る/聞く/感じることで多くの判断材料を持つ

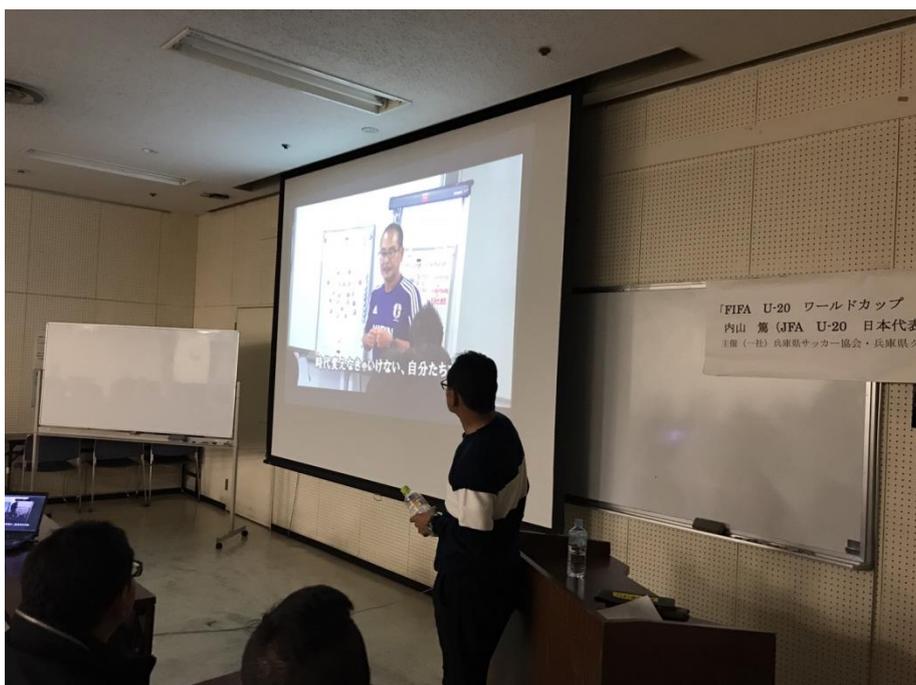
- 1、目的にあった一番良いプレーを、予測を持って考える
- 2、決断する
- 3、プレーする

プレイエリアやゲームの流れに応じた的確なプレー選択とそれを共有すること。

判断（目的にあった一番良いプレー）をグループ・チームで共有することで「連続性」「連動性」が生まれる。

⇒ 1つ1つの細かなプレー選択や精度に拘ることが重要である。

「勝敗の分かれ目は細部に宿る」



< これからへの示唆 >

・ 勝者のメンタリティー（自信・信頼・犠牲心）と冷静な頭を持つ
※ 野心や気持ちだけでは勝てない、双方のバランスが大切である。

・ 的確な判断の共有とプレー精度の向上
⇒ 育成年代から継続する

しかしこれを選手がピッチで表現することが一番難しい事である。

その為に「指導者が良い環境を準備する」こと、また「個々の選手を分析して的確な働きかけを行う」必要がある（常に Players First であること）。

良い環境…拮抗した試合（リーグ戦へと移行）

⇒ その中でこそ的確な判断、ゲームの流れを読む、ゲームをコントロールする力を鍛えることができる

そうした取り組みを継続することが「日本のサッカー文化の醸成」に繋がる。

< 質疑応答から >

育成年代の選手に対して、指導者はコップ（器や可能性）を大きくすることが大切である。それを18～20歳までは行うことが必要である。コップに水を入れる、水でいっぱいにすることに夢中になってはいけない。例えばミーティングは必要な時にしか行わず、かつそのミーティングも効果的（タイミングや場所）であることが重要である。

選手（個人・チーム）が欲している時を見抜くことが大切である。

試合について話をする時も「冷静に話ができる状況」で「しっかりとした分析」後に行う方が良い。

「ミーティングは指導者のパフォーマンスではない」

